建築家中原暢子の茶室設計の系譜についての考察

―建築家中原暢子の研究　第５報―

深石　圭子

本研究は、中原暢子がその生涯（1929 ～ 2008）において設計した図面を収集・整理・分析し、さらにそれに関連した資料を求めることで、中原暢子の茶室設計方法の変遷を明らかにすることを目的としている。

建築家中原暢子の茶室設計は新築茶室を中心に検討することによって、下記の４期に区分することができた。第１期は 1960 ～ 79 年とする。住宅の機能の一つとして茶室をデザインするものであり、結果として斬新な茶室が実現された。第２期は 1980 年～ 85 年、茶の湯を学ぶことによって茶事中心のデザインが展開される。その完成形が中原自邸である。第３期 1986 ～ 99 年は、小間、広間を備えた本格的な茶事が可能な茶室の実現である。茶事の分析を通して広間、小間、寄付、水屋、台所更に露地を含めたデザインを展開する。第４期 2000 ～ 05 年は林・山田・中原設計同人の閉鎖を契機として、自宅を拠点としながら茶事をプロデュースすることにより、建築、道具、料理の総合性を追及した。

キーワード：中原暢子　茶室　水屋　勝手　茶事プロデュース

１．研究の目的・背景

本研究では建築家中原暢子（以下中原と記載する）の茶室設計がどのように変化を遂げてきたかを明らかにすることを目的としている。

中原は本学紀要 26 号（1986）現代住宅建築の空間構成１「茶室空間の歴史的考察」において、「私は昭和 27 年（1952）以来、住宅の設計と監理の仕事をしてきたが、どういうものか、第１件目から茶室のある設計をした。その後１年に 1，2 件は茶室の設計に恵まれて来た。」更に「使い方がよくわからないために遂に 15 年（1973、昭和 48）位前から、自分でも茶の湯を習い始めた。次に茶会での使い方を知りたくて懐石料理を習い始めた。」[1] と述べている。

中原はすぐれて現代住宅建築家であるといわれている。池辺陽、広瀬鎌二の薫陶を受けた典型的な「モダニズム建築家」が、どのように日本の伝統に回帰したのか。雑誌に発表された作品は必ずしも多くない。又その中で自らの設計の方法を語ったものも少ない。個々の設計活動を通して、建築主の要望を聞き、個別の設計条件を整理し、モダニズム建築家としての作品としてまとめる地道な活動を通して結果として日本建築への伝統の回帰が行われた。「どういうものか茶室の設計に恵まれ」、その偶然によって茶室を極めることとなった。

その設計活動の特徴は日本の伝統的な住居についての研究と、実践を通して新たな和風住宅の創造を目指してきたということが出来る。その頂点のひとつが茶室建築である。長い茶室設計の経験を通して、どのように設計方法が変化し、どのような地点に到達したのかを、具体的な茶室を通して明らかにしたい。

２．研究の方法

まず第１は、「建築家中原暢子の研究」で行っ

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

ている残された設計図書からの分析である。その内容は「建築家中原暢子の設計図書集成」である。大きく分ければ、意匠図、構造図、設備図（電気、給排水等）で構成されている。この図面に基づいて見積合わせ、設計変更、現場での設計変更などがあり、現実に建設されたものとは異なっている。図面の中での相互の間の矛盾も見られる。

更にこの設計図書からだけでは、実際に竣工したものか、その後取り壊されたのかの判断が困難である。本論文では建設されたものであるか否かを問わず、又、既に取り壊されているか否かを問わず、分析対象としている。

実施設計図面で茶室と認められるものは14件であった。茶室か否かの判断基準は、炉が切ってあるか否かで判断した。茶室と部屋名称の記載があれば問題なく茶室としている。和室の部屋名称で炉が切ってあるものも茶室とした。年1～2件は茶室に恵まれてきたと中原が述べている言に従えば、少なくとも論文が書かれた1988年までに40件以上の茶室の図面があることになるが、実際分析対象となったものは、図面上炉が切ってあるものに限定した。結果、新築は9件、増改築5件、合計14件にすぎない。新築の中の増改築には大規模なものもあるが、簡単なものは釣床と炉を新築図面に書き加えただけの確認申請の必要のないものもあり、図面として残されていないものが多くあると推察される。

第2は本学紀要を中心にまとめられた茶室に関する論文4編を参照している。

① 茶室空間の歴史的考察　－現代住宅建築の空間構成1－
② “茶室：空間構成美を展開図から分析考察する”　－現代住宅建築の空間構成Ⅱ－
③ 現代住宅の空間構成Ⅲ　“極小空間をつくりすまう　その心理的考察を含めて”
④ 茶室・水屋の建築計画的研究　茶事（表千家・風炉正午）の記録 －時間を軸として－

第3は、中原暢子先生最終講義「木造設計図集出版にあたって」（1999年1月）である。

作品名の記載は、発表された作品はそれを用い、既に取り壊されたものについては、設計図書の記載によった。

3．新築茶室と増改築茶室の概要

本稿で分析対象とする茶室は、表1に示す通りである。茶室の新築が9件、増改築等が5件である。

新築茶室のうち、分析対象と出来るものは9件である。増改築及び模様替は合計5件である。更に新築茶室のうち複数の茶室を持っているものがあるので、それらすべてを茶室としてみると24茶室を設計していることとなる。又、1つの茶室であっても炉が複数切ってある場合がある。この場合、茶事を行う上では全く別の景色となるが、同一茶室と考え、ひとつの茶室としている。

新築茶室と増改築等茶室は特徴が異なるので別々に検討することとする。

3－1　新築茶室

第1期　新築茶室で設計図書が入手できた茶室の最も古いものは1961年であるが、1970年代までは茶室は1件当たり1室である。1973年ころから茶の湯を習い始めるが、複数の茶室を有した本格的な茶室の設計を依頼されるのは1980年代に入ってからである。そこで、1960～70年までを第1期とした。表1の1～3は第1期の茶室といえる。第1期の茶室は住宅全体の設計のなかで決定されるので、全体のデザインを優先し、茶室にしわ寄せがきている。茶室の知識を生かして自由にデザインをしている。

第2期　広間、小間を使って茶事を行うための水屋が完備している。しかし待合、寄付と小間、広間との関係や、懐石料理を振舞うための台所の充実等は検討されているが、部屋の大きさや茶室との繋がりで完成した形には到達していない。露地との関係も更に検討が必要とされる。単に茶室のためだけの建築ではないのでやむを得ない。しかしNak邸（自邸）ではこれらの問題を解決するために、徹底的な検討が行われ、茶懐石の専門家の意見を入れて水屋、台所（勝手）の関係をより完全なものとし、寄付、待合、外腰掛、蹲など中原好みの茶室の完成をみた。

第3期は、茶道の専門家のための茶室設計である。中原の表千家にこだわらず他流派の茶室も設計し、露地についても細部まで設計している。台所と小間、広間との音の問題は、自邸の設計で見

表１　分析対象　中原暢子設計茶室概要

	設計年	住宅名	建築の種類	茶室	炉	炉の切り方	勝手	床の種類	床の位置	床の大きさ D × W（㎜）	水屋の広さ（㎜）	水屋（流し） D × W（㎜）	広間小間の別	にじり口の有無
1	1961	Yos 邸	新築	4.5 畳	○	4 畳半切	逆勝手	踏込床	上座床	450 × 2700	1800 × 3600	400 × 900	広間	—
2	1964	K 別邸	新築	4.5 畳	○	4 畳半切	本勝手	織部床	上座床	—	1000 × 1800	550 × 950	小間	にじり口
3	1968	Oka 邸	新築	4.5 畳	○	4 畳半切	本勝手	踏込床	亭主床	500 × 3150	900 × 2950	300 × 850	広間	—
4	1975	Tak 邸	増改築	6 畳	○	広間切	本勝手	釣（吊）床	客座上座床	350 × 900	—	—	広間	—
5	1978	Mas1 邸	増築	4.5 畳	—	—	—	—	—	300 × 910	1060 × 1100	300 × 1060	小間	にじり口
6	1979	Ots 邸	増改築	8 畳	○	広間切	本勝手	本床	上座床	1010 × 1820	340 × 1820	430 × 1820	広間	—
7	1981	San 邸	新築	8 畳	○	広間切	本勝手	塗廻床	上座中床	910 × 1820	3450 × 2500	560 × 1400	広間	—
				6 畳	○	広間切	本勝手	置床風	上座床	455 × 910			広間	—
				3 畳台目	○	台目切	本勝手	塗廻床	風炉先床	970 × 1475			小間	にじり口
8	1981	Sai 邸	新築	4.5 畳	○	4 畳半切	本勝手	踏込床	上座床	404 × 1850	1933 × 1695 + 966 × 880	600 × 1270	小間	にじり口
				3 畳台目	○	台目切	本勝手	塗廻床	風炉先床	995 × 900	2555 × 2595 + 1010 × 1935	600 × 1300	小間	にじり口
				8 畳	○	広間切	本勝手	塗廻床	下座床	600 × 1385			広間	—
				8 畳	○	広間切	本勝手	踏込床	客座上座中床	1000 × 1600			広間	—
9	1985	Nak 邸	新築	8 畳	○	広間切	本勝手	本床	上座中床	750 × 1875	4660 × 2730 + 1875 × 600	550 × 1250	広間	—
				8 畳	○	広間切	本勝手	本床	下座床	910 × 1875			広間	—
				2 畳台目	○	台目切	本勝手	本床	下座床	800 × 1312	2008 × 1547	4501 × 1111	小間	にじり口
10	1987	Yam 1 邸	新築	8 畳	○	広間切	本勝手	本床	上座床	900 × 1875	1820 × 5460-1520 × 583	500 × 1200	広間	—
					○	上台目切	逆勝手	本床	客座上座床					
					大炉	広間切	逆勝手	本床	下座床					
				4.5 畳	○	4 畳半切	本勝手	本床	上座床	583 × 1520	910 × 2730	500 × 840	小間	にじり口
11	1988	Mor 邸	新築	8 畳	○	広間切	本勝手	本床	客座上座中床	900 × 1400	2800 × 2560 + 1300 × 1000 + 833 × 1462	650 × 1313	広間	—
				3 畳台目	○	台目切	本勝手	本床	上座床	833 × 1462			小間	にじり口
12	1989	Mas2 邸	増築	8 畳	○	広間切	本勝手	踏込床	上座床	600 × 1820	—	—	広間	—
13	1990	Ono 邸	新築	8 畳	○	広間切	本勝手	本床	下座床	909 × 1871	2955 × 3742 + 909 × 2780	606 × 1200	広間	—
				3 畳台目	○	台目切	本勝手	本床	風炉先床	787 × 1378	2955 × 1455	—	小間	にじり口
14	1994	Yam2 邸	模様替え	10 畳	○	広間切	本勝手	本床	上座床	909 × 1818	900 × 900	500 × 850	広間	—

つけ出した問題であるので丁寧に十分配慮して設計している。

第４期は、設計同人が解散され、中原も大学を定年退職したので、組織として設計を行える体制は無くなった。中原の茶の弟子と名乗られるＹ氏によれば、Nak 邸の長生庵（表千家堀内家茶室）の写し、暢庵を中心に月１回程度茶会を開くためのプロデュースを行っていた。つまり亭主及び茶懐石の料理人を呼んで、料理、道具、器、軸、花等を準備し、総合的な茶事の経験を体得する場を周到な準備をへて開催していたといわれる。

３－２　増改築等茶室

茶室の増改築、模様替え（増改築等という）は、極めて単純な方法で行われる。第一は炉を設けることである。風炉で対応することは可能であるとしても、増改築等で茶室を設えるという場合、少なくとも炉を切る。次は、床、床の間を設けることである。簡単なものは壁床、織部床などがあり、平面図だけでは確認することすら難しい。展開図で確認できる場合もある。吊床も簡単に設えることが出来る。もう少し本格的に茶道を行う場合、水屋を設ける。これは流しを設置し、給水と排水設備が必要となる。更に茶室らしくするために天井を仕上、勾配などによって分割する。

新築茶室と同じにすることは可能であるが、基本、茶を楽しむにはこの程度の増改築が多い。

なお、以降に掲載する平面図内には、茶室の使い方をわかる範囲で明確にするために、色の異なる三角で亭主、客の入口を示している。

４．新築茶室

４－１　Yos 邸（1961）（図１参照）

庭園史家の自邸である。現在この住宅は既に取

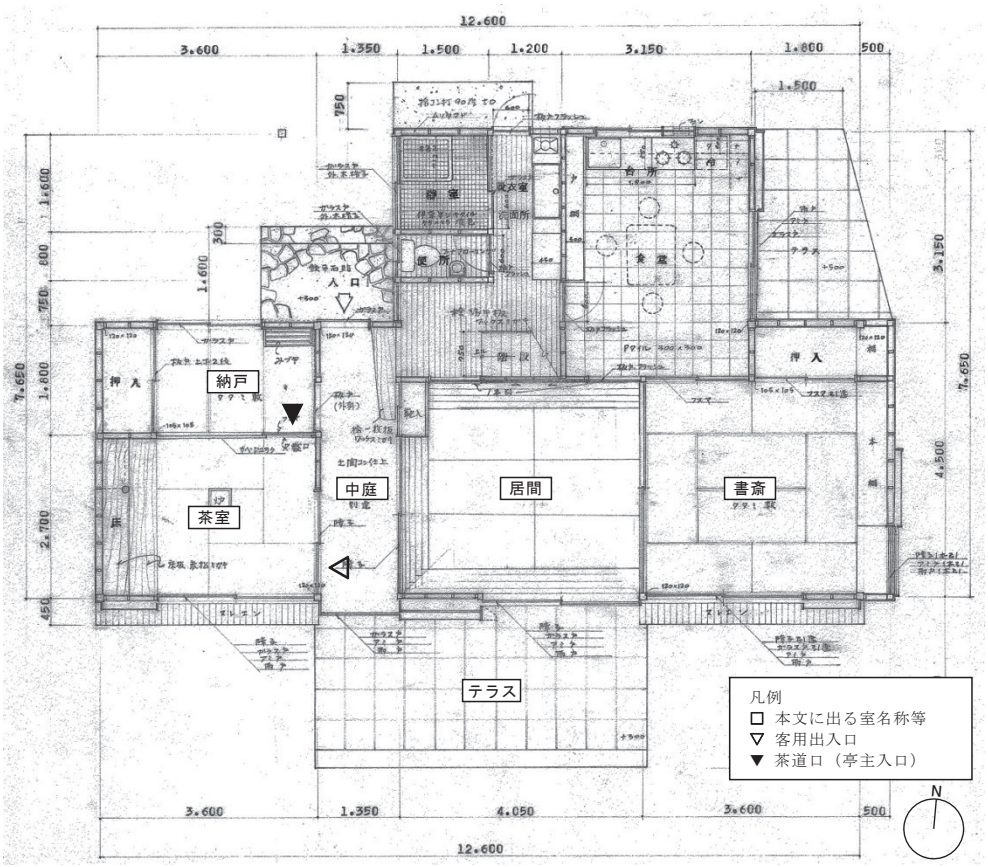

図１　Yos 邸１階平面図

り壊されており、氏が作庭した庭園もない。1階の居間・書斎・茶室・納戸、通り庭（図中：中庭）、2階の物置に大屋根をかけ、食堂、台所、浴室、便所等の水回り及び玄関（図中：中庭）は下屋に納められた明快な構成である。通り庭が玄関から庭に続き、庭の一部に設けられたテラスに続く。通り庭には夜や冬の間、鉢物を取り込むように考えられ、このテラスを含めて造園を自身が行ったと伝え聞く。

通り庭の右手（西側）に4.5畳の茶室及び1間の押入れを持った3畳の納戸が隣接している。平面図にはジュラク壁で仕切られ、茶道口は火燈口となっているが、展開図では3枚引きの襖、新鳥の子貼としているので変更されたものと考えられる。

床の間は奥行約400mmの蹴込床で、床板は36mmの赤松板ミガキ仕上としている。床の間と畳の間約500mmは床前板畳としている。床柱は末口90mmの杉ミガキ丸太が使われている。落掛は30mm × 150mmで幕板のような印象である。通り庭の庭に向かって左側に茶室を配置しているので、炉は必然的に逆勝手になっている。南面した開口部及び通り庭に面した開口部の屋内側はいずれも雪見障子である。外部の庭に面した茶室の建具は、雪見障子、透明ガラス戸、網戸及び雨戸で構成されている。納戸には半間「流し」が設えられており、水屋として機能するように考えられている。

庭園史家の茶室らしく、外部空間や中庭と呼ぶ通り庭に囲まれた開放的な茶室である。戦後すぐのこともあり、モジュールは900㎜である。

4－2　K別邸（1964）（図2、図3、図4参照）

このK別邸は中原にとって思い入れ深い別荘である。最終講義でも熱く語られたように平面は8.1m × 8.1mの正方形を1/4に割った4.05m × 4.05mの部分を重ね、屋根はムクリのついた約10m × 10mの方形屋根を重ね、小屋組はトラス

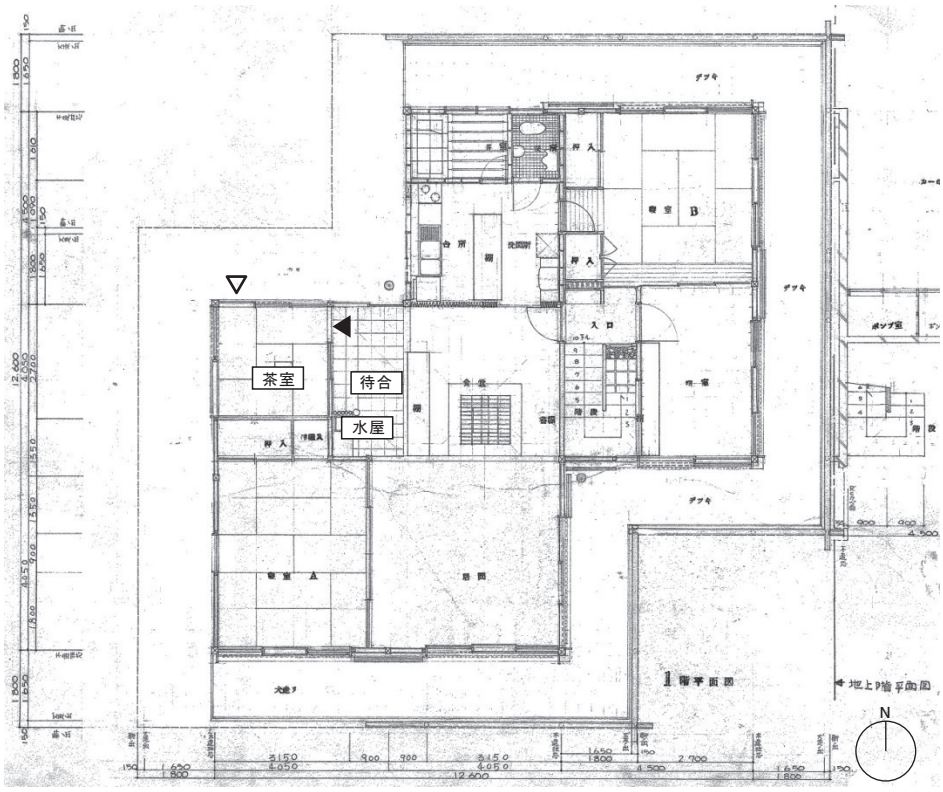

図2　K別邸1階平面図

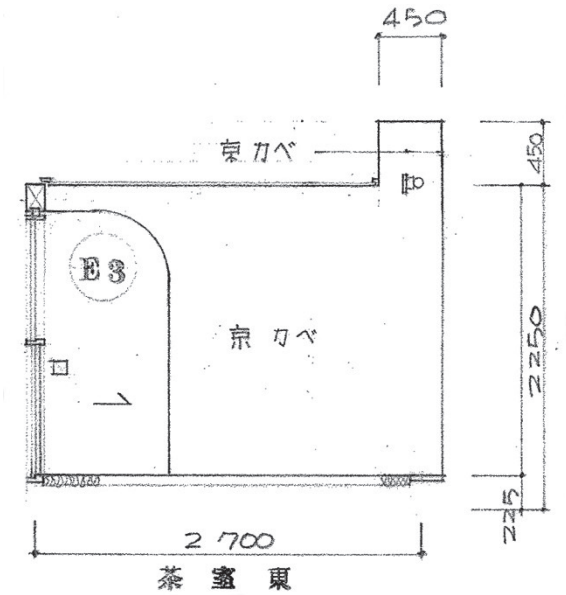

図３　Ｋ別邸茶室東展開図（茶道口）

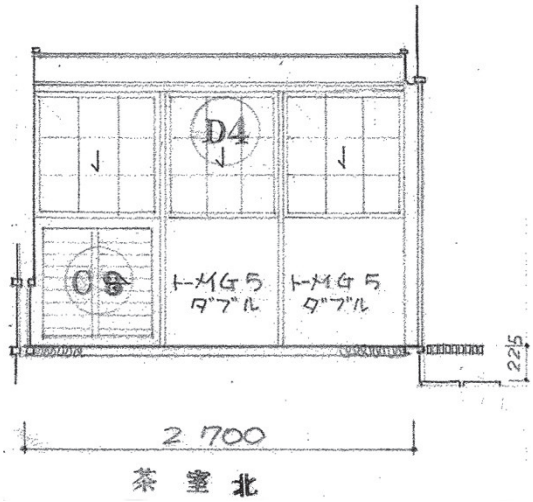

図４　Ｋ別邸茶室北展開図（にじり口）

とし大きなシェルターとして構成した。建築主はこの別荘を非常に大事に維持管理しており、柱等はヌカで拭き上げられ美しい姿を保っていたが、現在では持ち主が変わり荒廃した様子がうかがわれる。

さて、この茶室は4.5畳である。1976年6月号『住宅建築』で発表しているが、雑誌には茶室部分については写真での紹介はない。茶室の詳細図もないので、展開図から推測してみる。平面図には床の間の記載がないが、南側の壁に沿って天井に450mm × 450mmの空間を確保してこの中に間接照明を仕込んでいる。この照明が照らす壁が床の間を意味している。壁と畳の間に450mmの奥行きの板畳が敷かれている。床柱も織部床のような幕板もない。座れば間接照明を設置した板は、幕板のように見える可能性はある。このように、床の間の位置を想定すると亭主上座床となる。四畳半切り本勝手の炉となる。茶室の北展開図からは、北面が900mm × 900mmの6つのユニットで構成されており、その一つがにじり口であり、一般のにじり口よりも大きく900mm × 900mmの１本引板戸である。下段の他は透明ガラス5mmをダブルで用いている。上段の内側は雪見式ハガネバネを使った900mm × 900mmの上ゲ下ゲ障子であり、外側は檜の横羽目を使ったフラッシュの突出し窓である。

茶室に隣接して１畳程度の水屋及び３畳程度の待合が設えられている。

４－３　Oka邸（1968以前）（図５参照）

現在この住宅は存在しない。設計年代も不明であるが、図面番号の記載方法が通し番号から図面の種類別へと変化しているので、1968年以前であることは確実である。RC造の住宅であり、構造は7,700mmスパンで500mm × 500mmの柱を配したラーメン構造である。平面は卍型で北及び西立面の垂直に立てられた壁が特徴的である。1階客室も床、違い棚を設えた座敷である。

２階に4.5畳の茶室が設けられている。そして、半間の押入れを備えた１畳の水屋が設けられている。半間幅の2/3が流し、1/3丸炉（がんろ）を設けられている。RC造のため、流しの高さは床上360mmとなっている。

茶室の床の間は踏込床でヤニ松合板、RCの柱幅だけ板畳としている。天井は窓側にさつまよし、水屋側に杉中杢合板敷目貼で、間に松丸太を置い

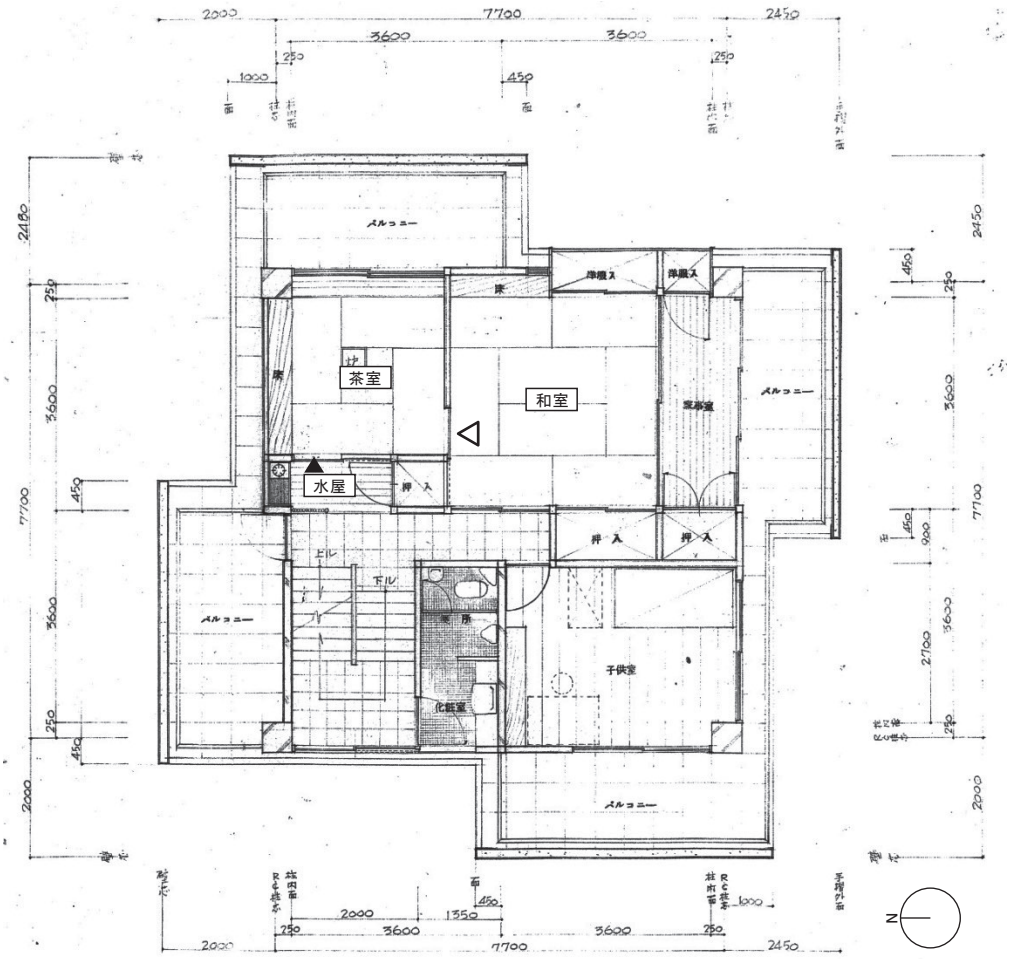

図５　Oka 邸２階平面図

て掛け込み天井風となっている。さつまよしを水平に、敷目貼部分に勾配をつけている。床の間は亭主床で、茶道口は火燈口である、客は隣接した和室から入ることとなるので、寄付、待合的な機能をどの部分で担うかは悩ましいところである。

寸法系は基本 900mm モジュールであり、柱部分は 500mm ダブルグリッドで吸収し、その他は 900mm グリッドでまとめている。

4－4　San 邸（1981）（図 6 参照）

1970 年代に中原は茶の湯を学ぶことによって、小間、広間を完備した本格的な茶室設計に挑戦することになる。この住宅は現存しており、2 世帯住宅である。2 階には外部から直接アプローチできるが、内部でもつながっている。茶室は 1 階に 3 畳台目の小間（図中：茶室 2）と 8 畳の広間（図中：茶室 1）、6 畳の広間（図中：和室 1）及び双方にサービスする水屋（2500mm × 3450mm）で構成されている。小間についてみると、点前座は台目畳となっている。床の間は風炉先床、炉は台目切である。床柱は六角山栗ナグリ、中柱はゆがみ香節、床の間はうすべりを敷き、天井は杉杢合板かがみ板である。天井仕上げは 3 種類に分かれ、点前座が野根板、床前の貴人座は蒲、客座は野根板の掛け込み天井である。給仕口は火燈口となっている。水屋を除き小間の寸法は尺寸で表記している。点前座の幅は 3.2 尺、貴人座は 3.5 尺、客座は 3.0 尺と微妙な寸法を採用し、広間（図中：茶室 1）との調整は廊下部分で小間を分離して納めている。

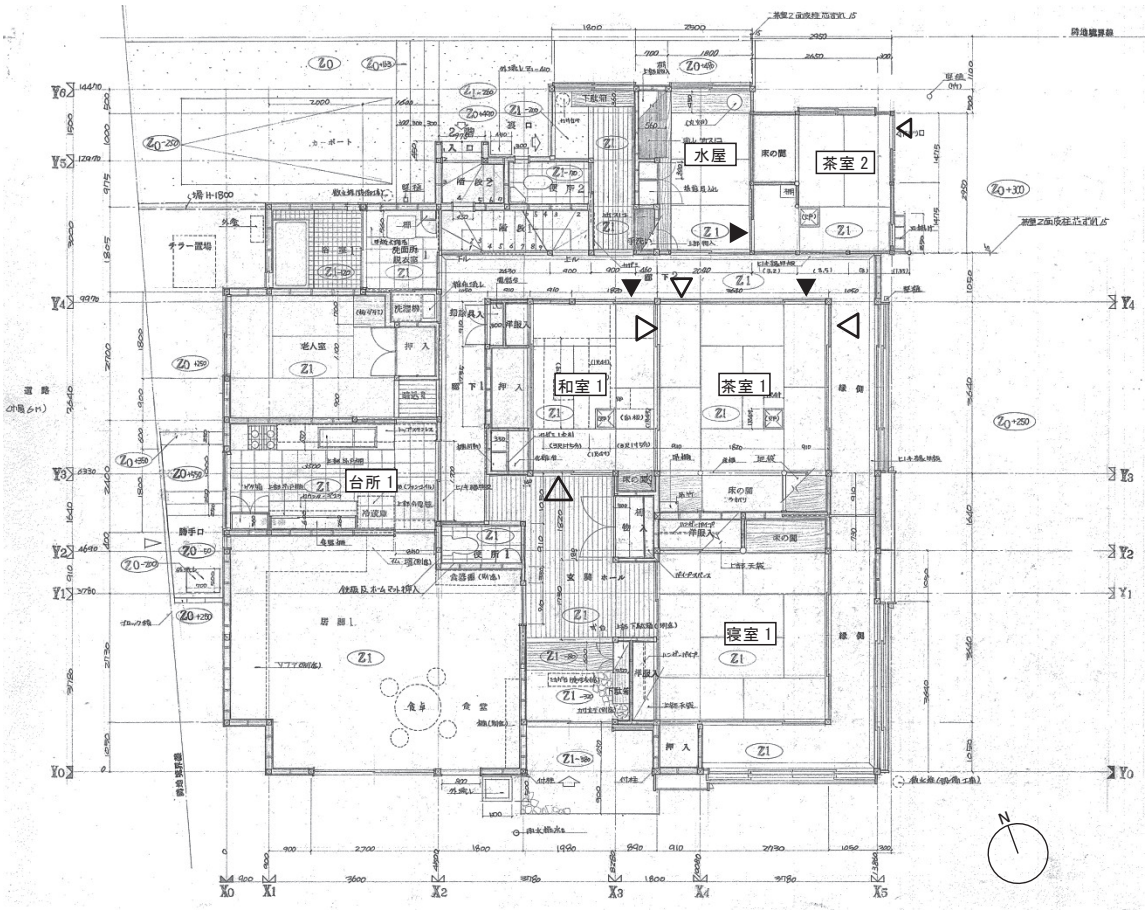

図 6　San 邸 1 階平面図

広間（図中：茶室１）は上座中床本勝手で同じく８畳の広間（図中：和室１）が隣接しており、大規模な茶事が行えるように考慮されている。寄付を寝室１で対応するのか、和室１で対応するのか明確には見えないが、寝室１で対応できれば台所１（勝手）と水屋、茶室の関係は好ましいように考えられる。広間（図中：和室１）には炉が３つ切ってある。改造が予想される理由は不明であるが、準防火地域で延焼の恐れのある部分に小間がかかるので、対応が考えられているのかも知れない。

４－５　Sai 邸（1981）（図７参照）

この住宅も現存している。店舗併用住宅で夫婦２人住まいと推察される。１階は店舗のみ、２階は居住部分、そして３階が茶室である。２階には非常にプライベートな 4.5 畳の茶室がある。３階の本格的な茶室との補完的な関係は無いので３階の茶室のみ検討する。

この店舗併用住宅は鉄骨造である。３畳台目の小間（図中：茶室）と８畳の広間が２部屋（図中：和室２、和室３）ある。３畳台目は変則であり 2,455mm × 2,805mm に構成されている。床の間の前は蒲竹竿縁天井、にじり口近くは、野根板おさえ茅付竹及び清水竹藤ツル巻の掛込み天井である。床には床框は杉節丸太、中柱は赤松まがり φ 60 としている。水屋と一体化する形で台所２を設け使い勝手の向上を図るとともに、小間及び広間へのサービスを潤滑に行えるように充分な工夫がなされている。水屋と直結している８畳の広間

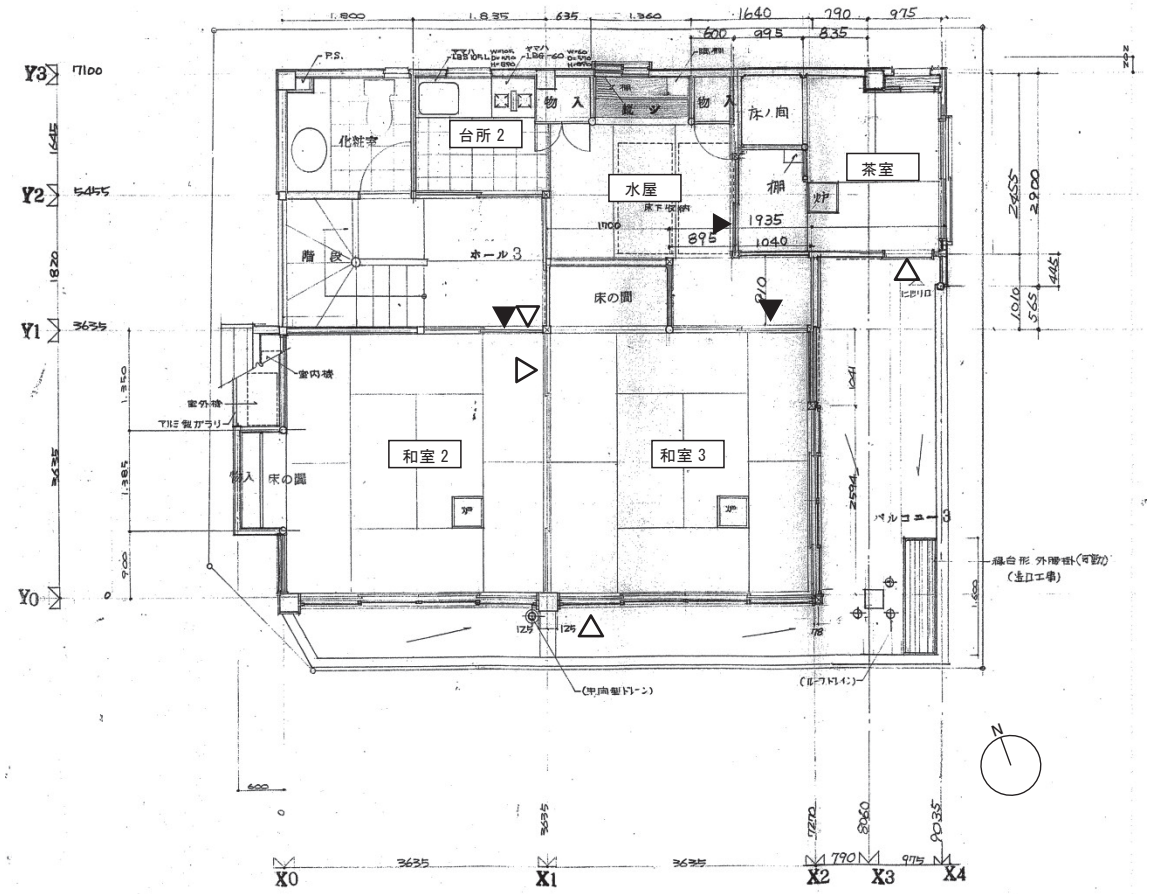

図７　Sai 邸３階平面図

（図中:和室 3）は下座床になる。他の広間 8 畳（図中：和室 2）は客座上座床となるが、実際は寄付として使うことが合理的に思える。しかしながら、3 階の茶室への客動線と裏方の動線の処理・分離が難しく、寄付、待合へ向う客と裏方をどのように調整するか、茶事の進行と段取りが重要になる。

中原は茶の湯を学ぶとともに、懐石料理を含む茶事全般への必要な配慮を、茶室設計にどのように実現するかという課題が、自邸設計へと向わせることとなる。

4－6　Nak 邸（1985）（図 8 参照）

中原作品の頂点とも言えるもので、詳細は本学紀要 28 号（1988）によるが、小間（図中：茶室）と 2 つの広間（図中：茶室 1、茶室 2）から構成される。小間は表千家堀内家の長生庵 2 畳台目の写し、広間は 8 畳 2 間、これを続けて使うことも出来るが、茶室 1 は下座床、茶室 2 は上座床である。小間と広間にはそれぞれ水屋を設え、特に広間の水屋は 6 畳に 1 間の流しを設け、充分なスペースを確保している。更に、それに連続して 10 畳の台所（勝手）を設け勝手口へとつながる。勝手口と客を招く玄関の分離が重要である。実際の茶事を考えるならば、勝手口は小間の水屋とつなぐよりも広間の水屋、台所（勝手）との連結が重要であることを示している。

更に、客が到着したとき身支度ができる手洗いを併設したクローク、そして寄付（図中：応接）が確保されることも必要である。第 2 期のこれらの欠点を改善し、建築家中原好みの茶室が完成した。

4－7　Mor 邸（1988）（図 9 参照）

第 3 期の最初の茶室であるが、多くの問題を残す設計となった。これも現存している住宅である。勝手口の動線と客の動線が解決されていないが、小間（図中：茶室）を使う場合は茶室 8 畳が寄付として機能し、広間を使う場合は、居間 8 畳を寄付に用いる。露地の設計、外腰掛やつくばい、刀掛等も設計している。多くの問題を残す設計となったが、総合的な茶室設計の始まりである。

4－8　Yam1 邸（1987）（図 10 参照）

この住宅も現存している。4.5 畳の小間（図中：小間茶室）と 8 畳の広間（図中：茶室 8 畳）で構成され、それぞれに水屋を設えている。6 畳程度

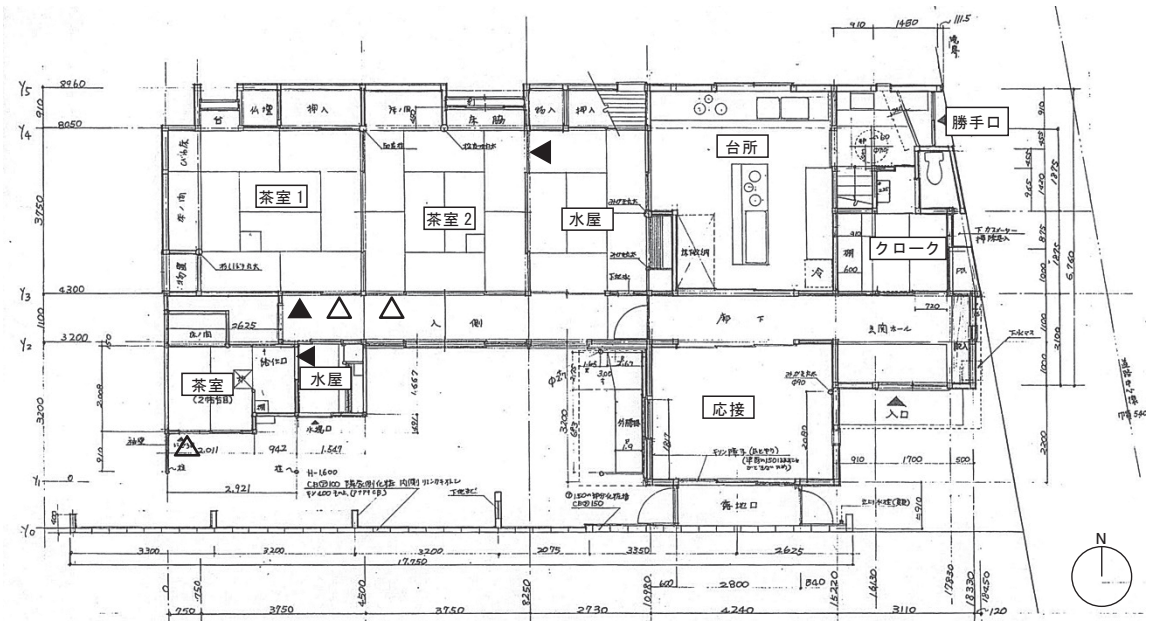

図 8　Nak 邸 1 階平面図

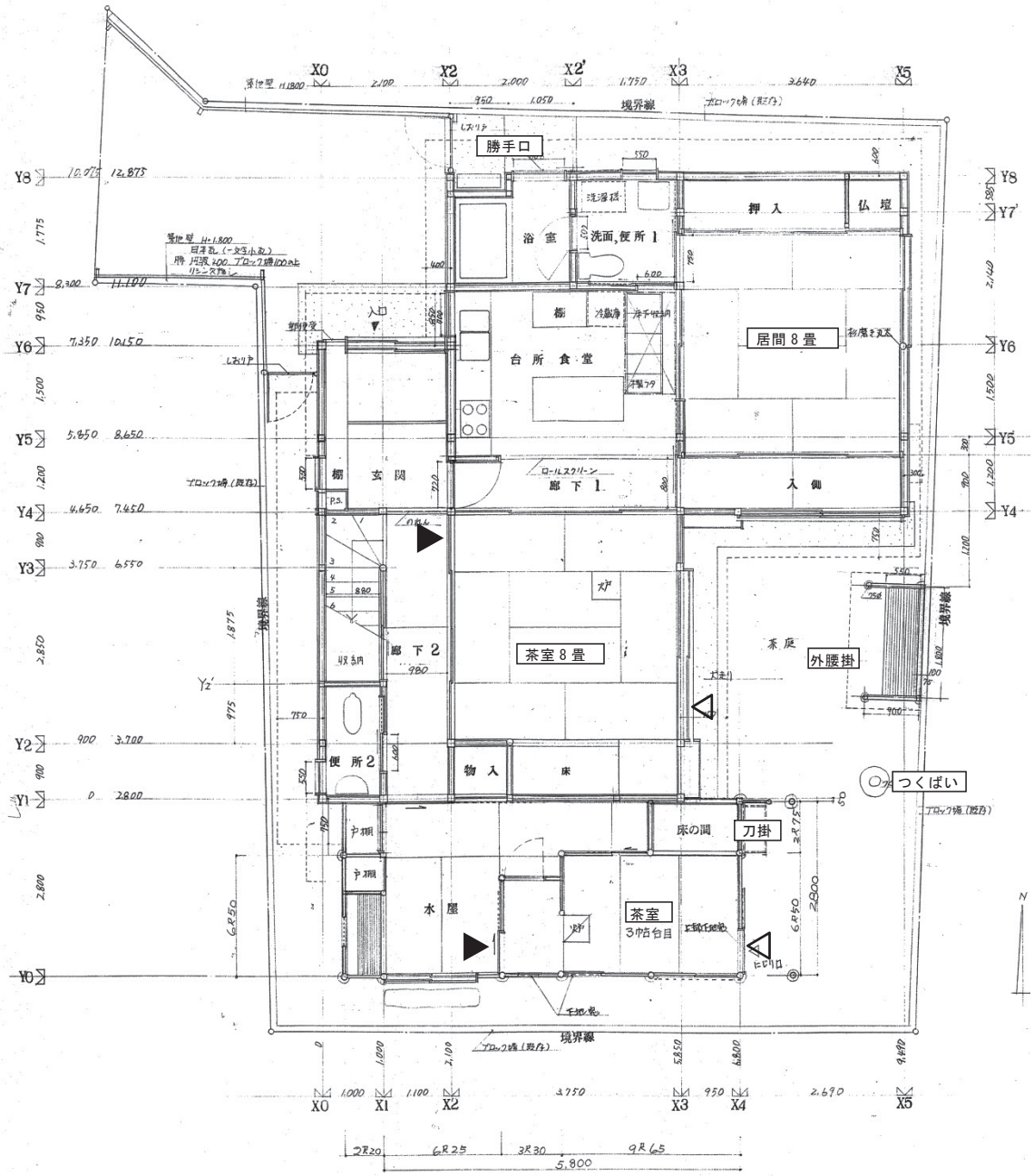

図9　Mor邸1階平面図

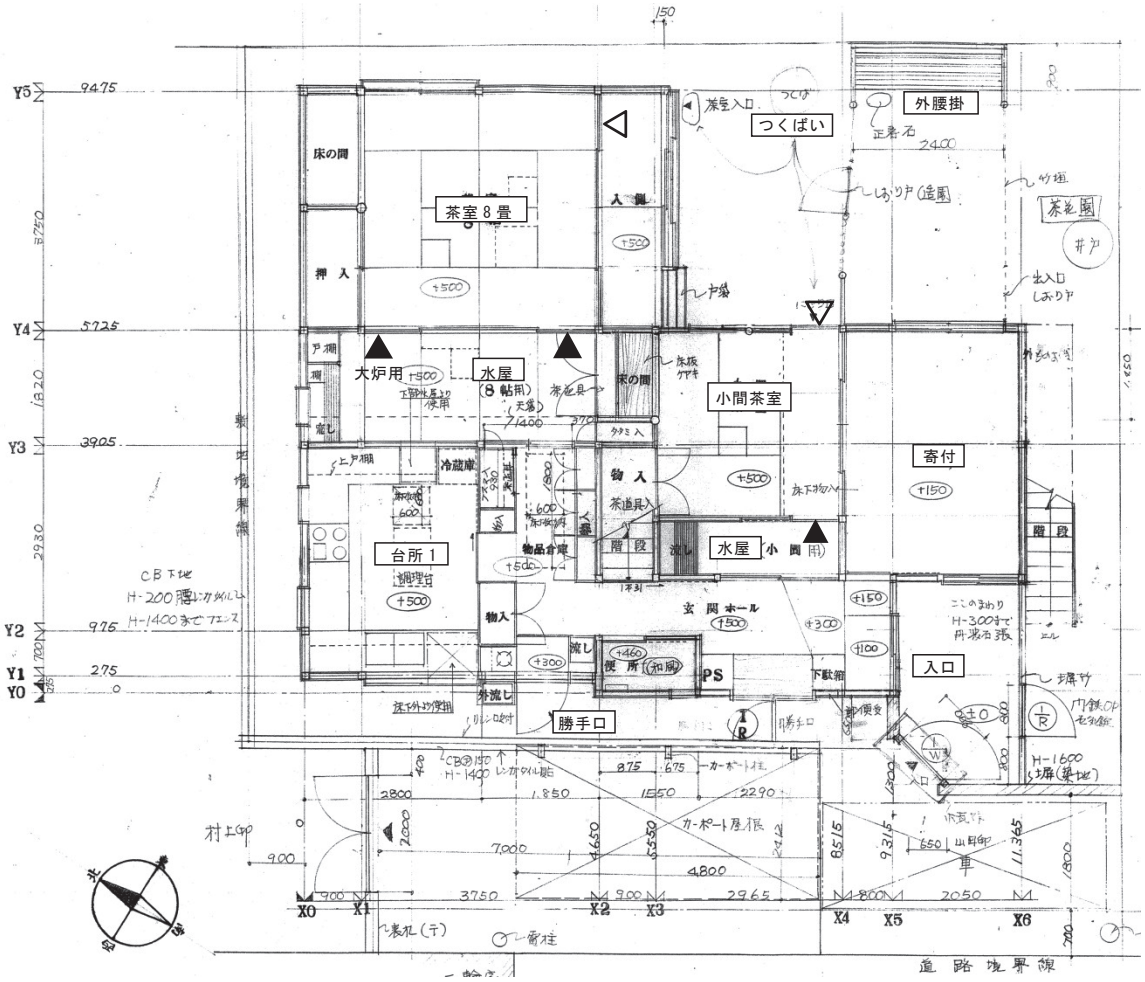

図 10　Yam1 邸 1 階平面図

の台所１（勝手）が物入れ等で囲まれており、慌しい準備の様子が広間や小間には伝わらない。中原自邸で唯一気に掛けていた問題点をこの茶室では解決している。日常生活部分を２階に完全に集中し、茶室部分と分離した結果である。

玄関（図中：入口）を入ると寄付へと直線的にアプローチできる。寄付を経て露地の外腰掛へと到達する。寄付と露地のデザインは細部にわたってデザインされている。決して広い敷地ではないが、小間、広間へのアプローチも十分に検討されてデザインされている。

勝手口を通って台所へと茶懐石の支度を十分に行える台所１が準備されている。Nak 邸（中原自邸）の経験が十分に展開されている。

４－９　Ono 邸（1990）（図 11 参照）

これも現存している茶室である。住居部分は別棟になっているので、茶室の設計環境としては理想的である。

更に、玄関と勝手口とが全く分離しているので、動線の構成は明快にデザインできる。玄関から直接寄付に入り洗面所、便所が併設され客に対する充分な配慮が感じられる。8畳の広間（図中：茶室）、3畳台目の小間（図中：茶室小間）にはそれぞれ水屋（図中：水屋１、水屋２）が設けられ、小間水屋、広間水屋そして勝手（図中：厨房）まで裏動線が明快につながるとともに、物入れ等で遮音に配慮している。露地も外腰掛、雪隠、内腰掛と整備し、中原の茶室としては完成の域に達した作品といえる。

第４期の茶室設計はない。自宅での茶事プロ

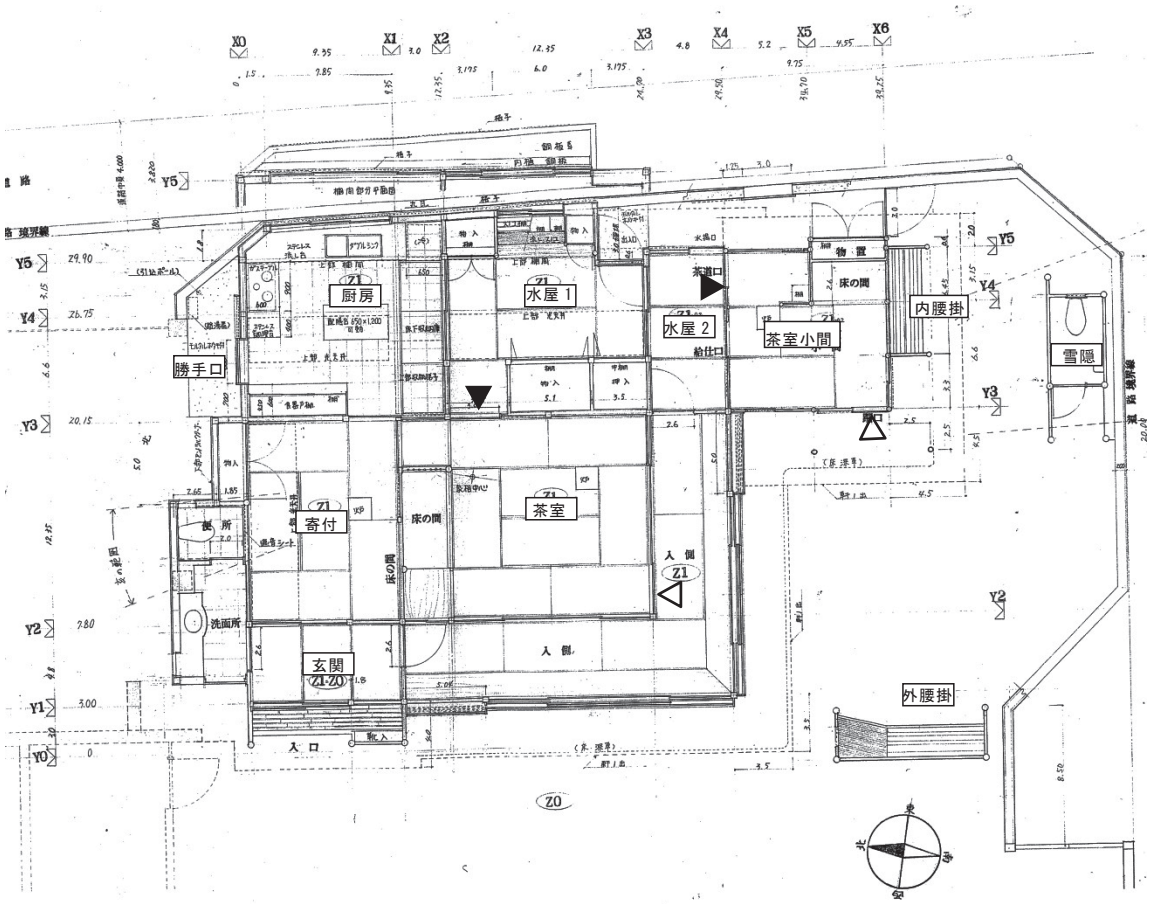

図 11　Ono 邸茶室１階平面図

デュースを行っているが、その中で中原好みの道具類は、中原の死によって分散してしまった。Nak 邸（中原自邸）で茶会を催された表千家堀内家の宗立宗匠といった方々にお話を聞き、茶会記のようなものが残っていれば、その雰囲気を想像することが出来るかもしれない。

5．増築茶室

中原の茶室設計を４期に分けてみてきたが、増改築設計を見ると一貫して変わらないものがある。茶の湯を学び楽しもうとする人が、自分の可能な範囲で茶室を持ちたいとすると、出来る範囲でサポートするという態度である。大きな茶室をつくる必要は無い。炉ひとつ切る、床の間ひとつ作る、そして水屋を持ちたいなら廊下の端にでも充分だというメッセージである。幸いにして年に１～２件茶室にかかわることに恵まれたとはそのような意味である。

５－１　Tak 邸（1975）（図 12 参照）

910mm × 2,700 ｍｍの茶室を１階に増改築し、釣床を設け、炉を切ったもの。水屋はない。

５－２　Mas1 邸（1978）（図 13 参照）

現存している茶室である。蔵のある旧家に食堂・台所を鉄骨でつくるとともに 4.5 畳の茶室を増築している。準防火地域であるため躙り口及び開口部は防火戸としている。水屋は廊下の突き当たりに 300㎜の奥行で流しを設けている。この廊下部分の水屋は以後さまざまな茶室で用いている。奥にある土蔵は、様々な茶道具を保存するために十分利用できる。中原はすでにこの時期に小間の設計を行っていた。

５－３　Ots 邸（1979）（図 14 参照）

増改築し、８畳の和室を設け、炉を切り、廊下部分に水屋（流し）を設けたもの。

５－４　Mas2 邸（1989）（図 15 参照）

増改築であるが、和室に炉だけ切り、床の間を設けたもの。これは大規模な増築であるが、茶室としては最低限のスペースを確保している。

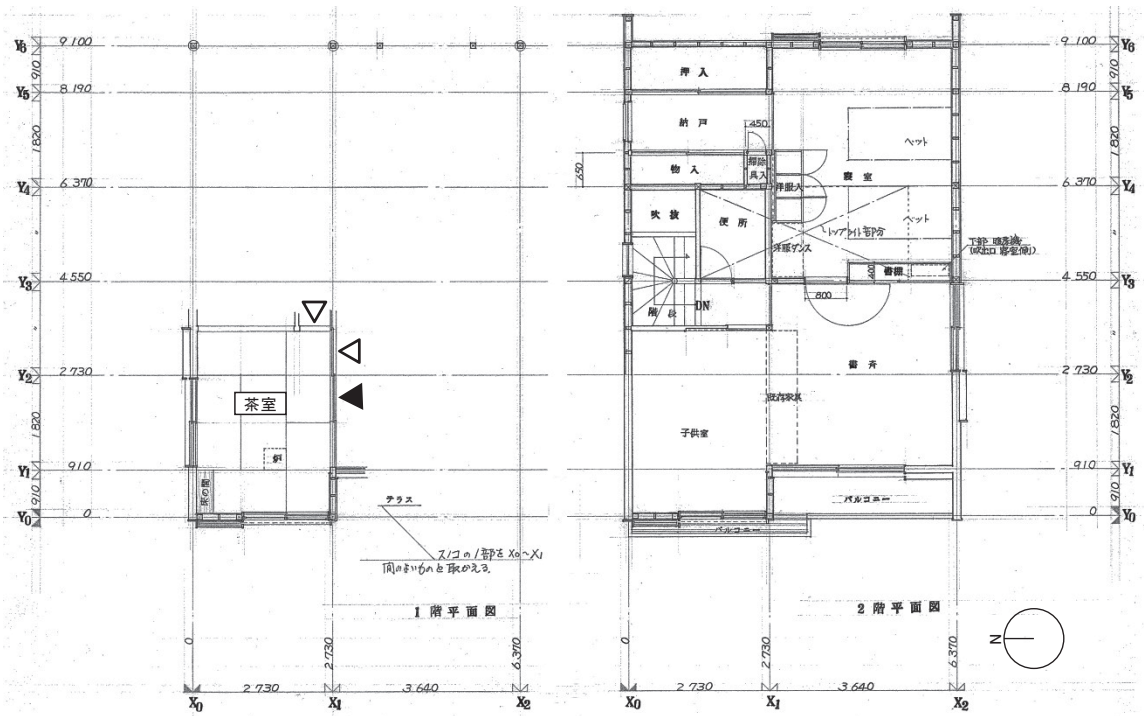

図 12　Tak 邸 1・2 階平面図

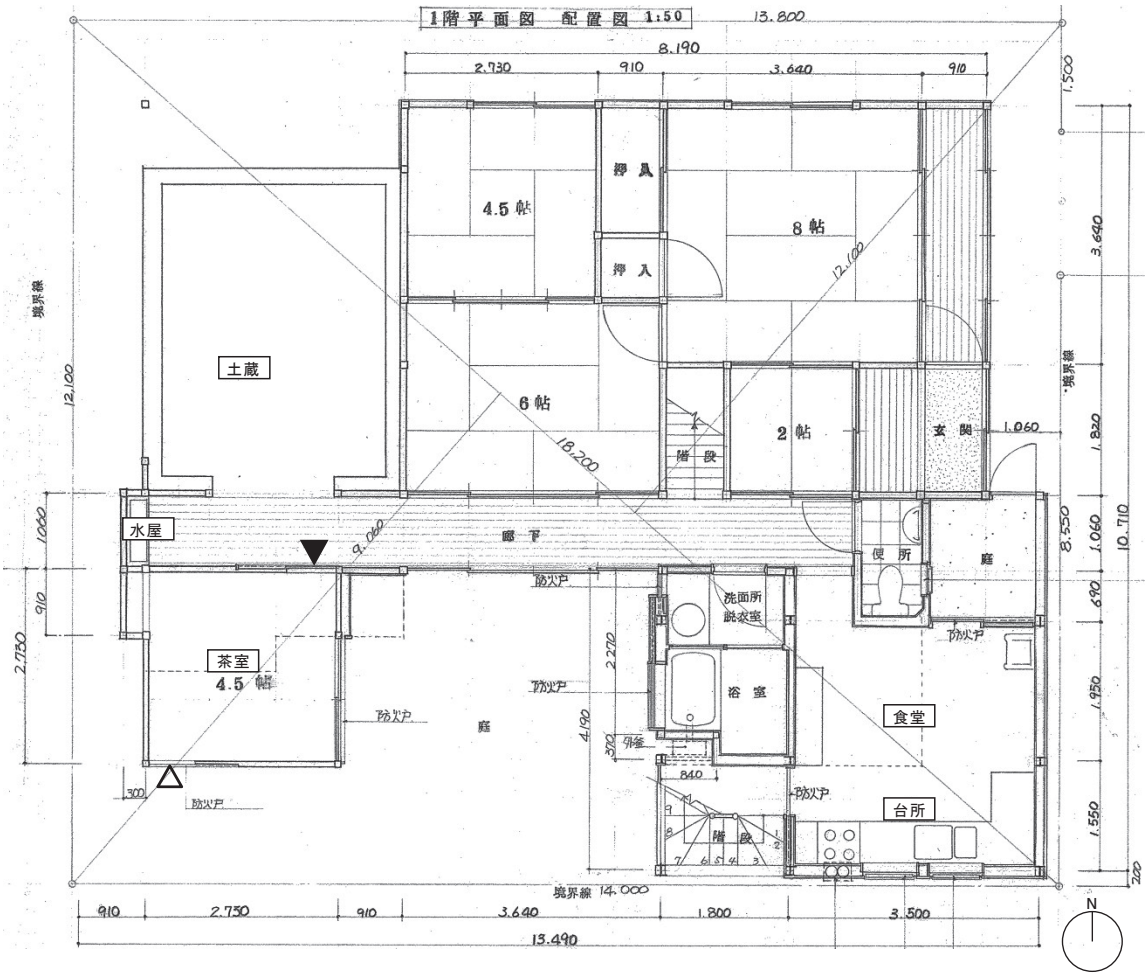

図 13　Mas1 邸 1 階平面図

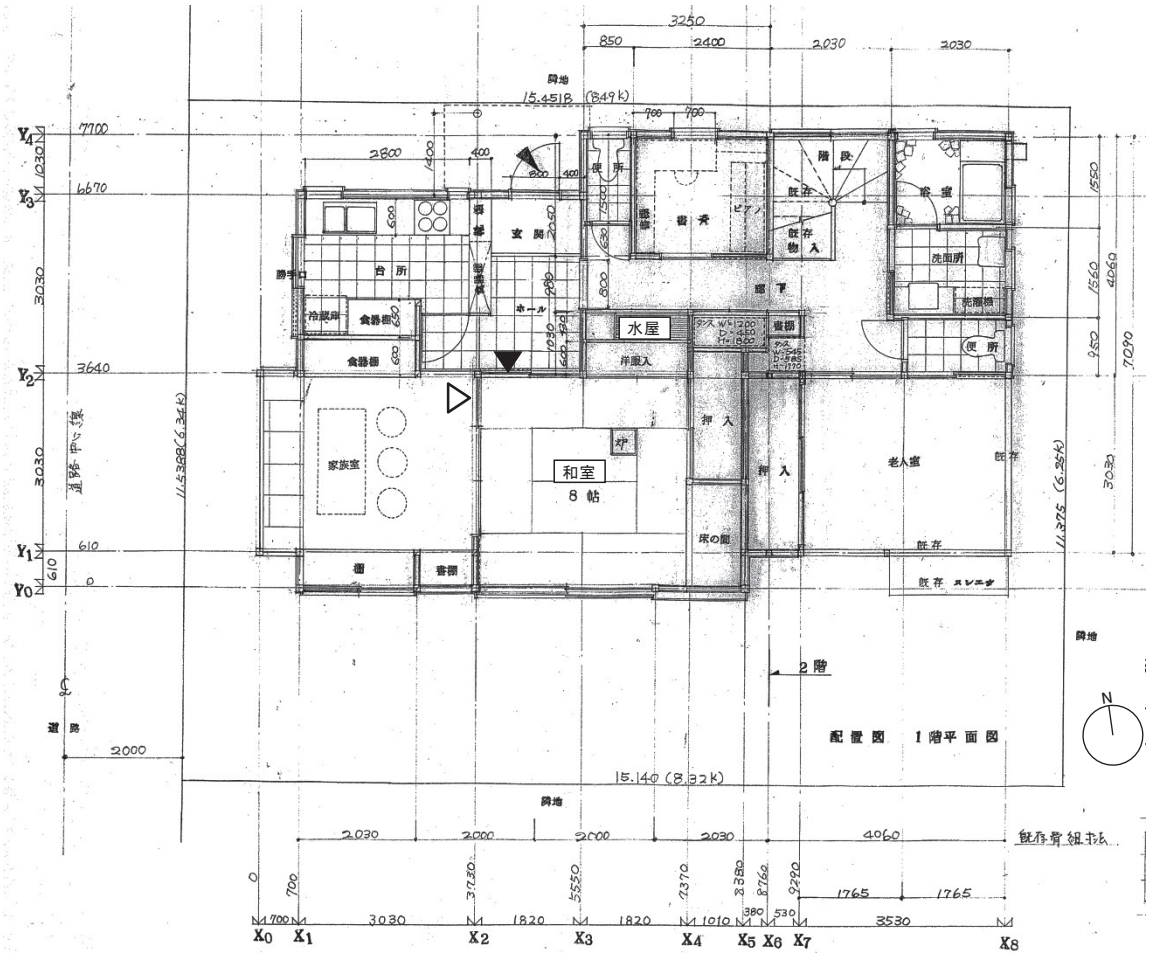

図 14　Otu 邸 1 階平面図

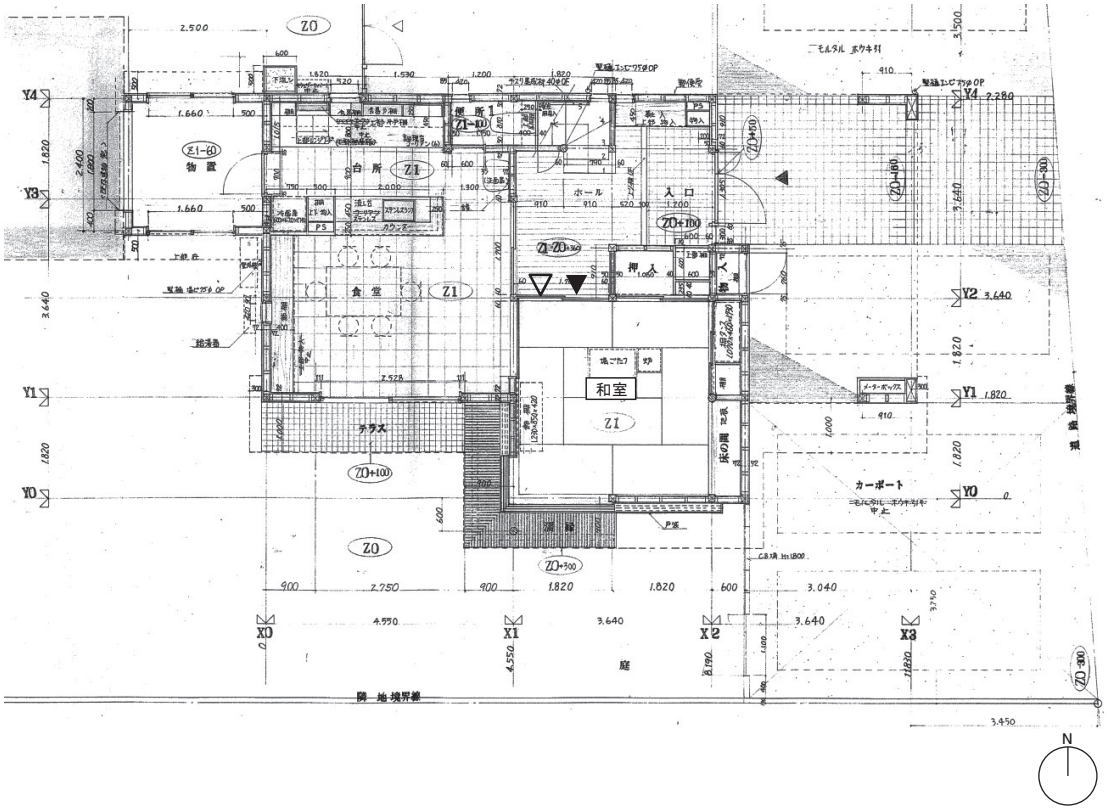

図 15　Mas2 邸 1 階平面図

５－５　Yam2 邸（1994）（図 16 参照）

10 畳の和室を改装し、そこに炉を切り、廊下部分に水屋（流し）を設けたもの。

６．考察

林・山田・中原設計同人を解散してからは、設計活動は全く行っていないので、設計図書は何も残っていない。茶の湯のお弟子さんからは、その後茶事のプロデュースをしていると教えていただいた。

初期の茶室は、茶室に関する知識を武器に斬新な茶室が実現された。しかし茶の湯を研究する過程で茶室自体はオーソドックスなものへと回帰した。茶の湯を愛する人々のコミュニティの中で設計を始めると表面的なデザインとは無縁となってきた。

茶事の中で求められる心遣いを茶室設計の基本に置くにはどのように設計するか。生活に対するアプローチと同様に、茶事に対する周到な分析であり、茶事に対する客と亭主の動線の分析である。これは若い頃学んだ機能主義的アプローチである。若い頃は設計を通して生活を変革しようとする研究室で学んだ。その後はむしろ現在ある生活を分析し、建築主が満足するデザインをすることからはじめている。寄付、待合、小間、広間、水屋、台所（勝手）などの可能性と必要性を充分に把握して設計を行ってきた。

しかし、茶事は茶室だけでは語れない。茶の湯で使う道具、懐石料理、作法等が渾然一体となって茶事を支えている。茶人表千家堀之内家（宗立宗匠）千葉雄史郎氏及び料理人懐石料理仕出し「いわや」岩谷勇夫氏を招いての茶事は新しい生活デザインを追及する契機となったと考える。

７．謝辞

本研究の執筆において、多くのご助言をいただいた本学名誉教授杉本茂先生に深く感謝いたします。

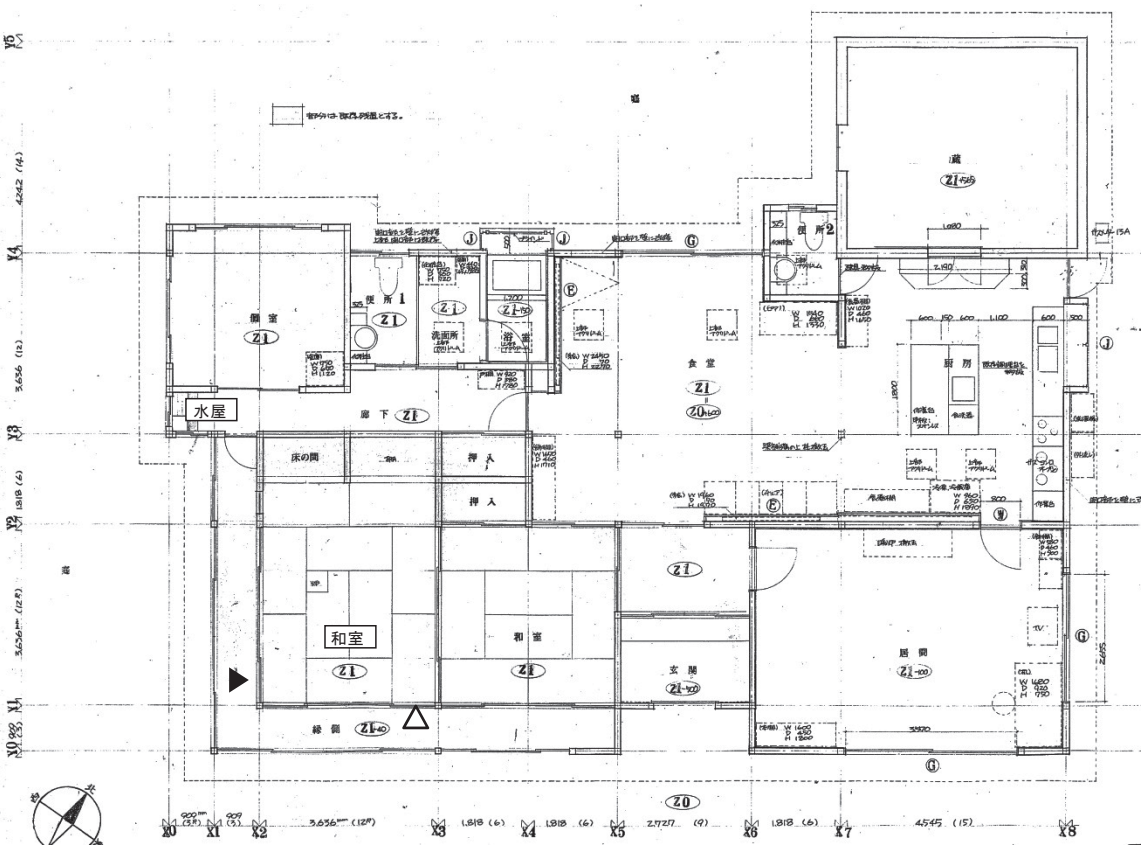

図 16　Yam2 邸 1 階平面図

引用文献

1）中原暢子：茶室空間の歴史的考察　－現代住宅建築の空間構成 (1) －．東京家政学院大学紀要 26 号：pp.53-59（1986）

2）深石圭子：建築家中原暢子の設計図書集成（2013）

参考文献

中原暢子：茶室空間の歴史的考察　－現代住宅建築の空間構成 1 －．東京家政学院大学紀要 26 号：pp.53-59（1986）

中原暢子：“茶室：空間構成美を展開図から分析考察する”　－ 現代住宅建築の空間構成Ⅱ－．東京家政学院大学紀要 27 号：pp.63-71（1987）

中原暢子：現代住宅の空間構成Ⅲ　“極小空間をつくり住まう　その心理的考察を含めて”．東京家政学院大学紀要 28 号：pp.83-94（1988）

中原暢子：茶室・水屋の建築計画的研究：茶事（表千家・風炉正午）の記録　－時間を軸として－．東京家政学院大学紀要 32 号：pp.149-161（1992）

中原暢子：中原暢子の木造住宅設計図集（1999）

中原暢子：K 別邸．住宅建築　日本の集落 6 千葉県．pp.55-72（1976）

深石圭子：長覚院と水野レストランの設計についての考察　―建築家中原暢子の研究　第 1 報―．東京家政学院大学紀要 56 号：pp. 107-114（2016）

金子雄太郎・深石圭子・金子高裕：長覚院本堂に関する構造工学的考察　―建築家中原暢子の研究　第 2 報―．　東京家政学院大学紀要 56 号：pp. 115-120（2016）

深石圭子：長覚院の保存に関する一考察　建築家中原暢子の研究　第 3 報．日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集 9478（2016）

深石圭子：昭和 40 年代柿生農協による住宅相談事業における中原暢子設計の農家住宅についての考察　建築家中原暢子の研究　第 4 報．日本家政学会第 69 回大会ポスター発表（2017）（in press）

（受付　2017.3.29　受理　2017.6.19）